

# 婦人と子ども

大正五年九月五日  
第十六卷 第九號

## モンテソリーの教育説に就て

日本女子大學校附屬  
小學校主事 文學士

河野清丸

序論……………伊太利教育の特徴——モンテソリーの教育の沿革。  
本論……………知育——訓育——體育。  
結論……………自由主義と兒童觀察。

### 序論

#### 伊太利教育の特徴

伊太利の教育はその教育革新運動の影響を受けた結果として甚しく科學的である、哲學といふものをまるで取込んでゐない。純粹に科學的な教育これが伊太利教育の特徴である。教育といふものは哲學を全然顧みずに科學的にのみ行はるべきものであるといふやうな見方に對しては私は贊成出

來ない、何故ならば教育の目的論は何としても哲學から出て來なくてはならないからである。しかし兎に角モンテソリーは伊太利の教育革新家の一人である、而して今日のところでは最後の一人である。

科學的な教育とは人類學、實驗心理學、實驗教育學を基本學科として被教育者を系統的に研究するものである。身體の方は人類學的に研究し、精神の方は實驗心理學的及び實驗教育學的に研究す

る。これが伊太利教育學の傾向である。而してモンテソリーはこの伊太利教育の——今日のところ——最後の大家である。モンテソリーが婦人の身を以て教育上斯る重要な地位を占めて居るといふことは頗る注目しに價することである。

### モンテソリーの教育の沿革

モンテソリーは醫科大學を卒業した醫學博士である。伊太利で婦人の身を以て醫學博士の稱號を得たのはモンテソリーが最初である。モンテソリーは大學卒業後、異常兒の教育に従事した、而して種々苦心を重ねた結果、異常兒教育に於て著しい効果を收め得るに至つたのである、そこでモンテソリーはこの異常兒に施す教育を普通兒にも應用してみたらば何うであらうかと考へ始めた、丁度その時一方に於て、ローマでは貧民家屋改良の議が盛んに唱へられ出した。一體ローマの貧民窟は實に慘憺たるもので、家賃を取り立てる爲めに

狭い所へごちや／＼と澤山の家を建てるので光線は通らず、饑<sup>す</sup>ゑたやうな空氣が充滿してその中で赤ん坊が泣く、不具者が喚く、大人が喧嘩する、まるで此の世ながらの地獄である。そこで是非ともこの貧民家屋を改良しなければならぬといふ聲が大となり、遂に家屋改良會社なるものが成立するに至つた。エドワード・タラモーといふ人がこの會社の社長となり、通氣、採光に注意して貧民家屋の改築に取掛つた、而してタラモーは學齡以前の子供が家に居ると家を傷けて困るがこれは何うしたものであらうと考へて托兒所の設立を思ひ立つた。タラモーはそこでこの相談をモンテソリーのところへ持ち込んだのである。モンテソリーは喜んでタラモーの相談に乗る、托兒所を拵へた。これが即ち有名な「兒童の家」である。

### 本論

### 知育

モンテソリーの知育で珍しいのは感覺教育であつて、これが實に系統的に行はれて居る。熱い冷たいの溫覺教育から匂ひを嗅ぐ嗅覺教育、視覺、觸覺、聽覺の教育、即ち心理學で所謂感覺の教育を系統的に順序立て、分解的に行ふのである。

從來とてもベスタロツチやフレーベルが感覺教育を顧みなかつたのではないのであるが、モンテソリーは感覺教育を更に一層重く見て、これを科學的に、分解的に行つたのである。その中でも視覺の教育は最もモンテソリーの力を盡したところである。視覺は諸感覺中一番高尚なものであつて代表的感覺と目せらるべきものである、モンテソリーが視覺の教育に力を盡したのは故あることである。少しく餘談に亘るが視覺が代表的感覺であるといふことを説明すれば、例へば直觀教授といふ言葉がある、これはたゞ實地に見るといふことだけを意味して居るのではなく、すべての感覺器官に訴へることを意味して居るのであるが直觀と

いつて觀（即ち視覺）で代表させて居る。又觀念といふ言葉があるが、これも字の成立から言へば他の當然成語となるべき觸念、聽念、嗅念等を代表して、觀念といふ言葉のみが排外的に承認せられて居る、これ亦視覺の代表感覺たることを證するものではないか。又佛敎の方で「色即是空、空即是色」といふが、この色も色ばかりを現すのではなく森羅萬象（即ち感覺器官によつて知り得べきすべてのもの）を指すのである。然るに色とのみ言つて他を代表させて居る。

視覺教育は次の三つに小別せられる。

形状の感覺を養ふもの  
視覺教育 大小の感覺を養ふもの  
色彩の感覺を養ふもの

【形状の視覺教育】——この爲めには薄板を圓形方形、菱形、多角形等種々の形に作つて置き、又是等の形を嵌め込むべきフレーム（枠）をも作つて置く。これらの形とそれに對する枠とは皆で三

十六枚ある。最初は圓形と方形とを取り出して、それ／＼枠を外して机の上へ投げ出して置く、兒童はこれを拾ひ取つて圓形は圓形の枠へ、方形は方形の枠へそれ／＼嵌め込むのである。モンテソ

リーは對照（反對）の甚しいところのものから教へ出し、次第に反對の度の尠いもの、即ち似寄つたものに進むといふことを原則として居る。故に一番初めは圓形と方形とを枠に嵌め込む遊戯を行はせるのである。加之に圓形はどんな風にもつて行つても枠に嵌めることが出来る、方形は圓形程容易ではないが矢張やさしく嵌めることが出来る不等四邊形になると稍々六ヶ敷くなる。モンテソリーは兒童に觸筋覺を働かさせて先づ枠を極く軽くさすらせ、次に形の邊をさすらせて前と同じ感じを得たら嵌めてみるといふやうにさせるのである、これが最新心理學の智識を應用したと言つてモンテソリーの誇る點なのである。尤も日本の兒童はこれを行はせてみると、さすらすにドンド

ン嵌めて了ふ、私はさすらなければさすらなくともよいと思ふ、無理にさすらせるのは反つてモンテソリーの自由主義に背くわけである、この邊は囚はれずに臨機應變に行ふべきである。

【大小の視覺教育】——これにも種々の教具があるが「大段階」といふのは長さも幅も同じで、ただ厚みだけの違ふ柁のやうなものが幾つもある、これを一番厚いのから順に並べると段階が出来上る、兒童は混ぜ合してある中から何れが一番厚いかと探すので何時か知らず大小の感覺を養ふのである、尙これは柁は机の上にごちや／＼に混ぜて置き、段階を作るところは他の場所にする、一つの柁を運んで行つた後、次ぎの柁を運ぶには前の柁の大きさを心の中に覚えてゐなければならぬので一寸六ヶ敷くなるが、其の場で段階を作り得るやうになつて後には斯る練習をも行はしむるのである。それから又「分銅嵌め」といふ教具がある、これは長方形の木材に十個の穴が列んで開

いて居て、これに相應する十個の分銅がある。分銅は同高異徑のもの、異高同徑のもの、異高異徑のものと斯う三種ある、これをそれ／＼穴へ嵌め込むのである。これは三人一組になつて遊び、自分のへすつかり分銅を嵌めて了ふと取り替合つて遊ぶのである。これも兒童に觸筋覺を働かさせて行はせるのである。子供は大變これを喜ぶ、一度實驗的に傍で唱歌を唱つて騒いでみたが分銅嵌めを遊んでゐた子供は心を亂さずに熱心にその遊びを續けてゐたさうである。この他「方塔」といふ教具もある、これは大きな異なる十個の正立方體があつて、これを大きいものを最下として塔の如く積み上げるのである。尙又「長段階」といふ十本の棒から成り立つて居る教具がある、この十本の棒は長いものから順次短いものに至るので、最も長いものが長さ一メートル、其の次が順次一メートルの十分の一づつ短く、即ち十分の九メートル、十分の八メートルといふ風にして、最後の最

も短いものが十分の一メートル、即ち一センチメートルの長さになつて居るのである。是等の棒は一センチメートル毎に青と赤とで色が塗り分けられて居る、これを短い方から順次長い方へ、又長い方から順次短い方へと重ねて並べる練習を行ふのである、十本の棒の端をキチンと揃へると順次棒の段階が出来、又各棒は一センチメートル毎に色が塗り分けられて居るから十本手際よく並べると色もチャンと揃ふやうになつて居る。これは視覺練習のみならず、簡單なる算術の教授にも利用せらるのである。

【色彩の視覺教育】——長方形の大箱に八つの抽斗が附いて居る、この各の抽斗には赤、橙、青、黄、綠其他都合八種の色絲巻きが八個づゝ入つて居る、それで色は都合六十四通りあることになる。各色は濃淡の度に從つて八個あるので、この六十四個の絲巻きを色順、濃淡の順に從つて排列する練習を行ふ。

感覺教育に關してはこの他ピロウド、羅紗、金巾、サンド・ペイバー等を目をつぶつて觸り、これはすべくして居る、これはさらさらして居ると判断をする觸覺の練習もある。

**感覺教育が一通り済むと次ぎは睿知教育に移るのである。**茲で一寸御注意申して置くのは睿知といふ言葉の意義に就てである。これは英語のインテレクト (intellect) であつて、普通に思考作用を意味して居るのである、然るに**モンテソリーの用ゐて居る睿知といふ字は普通の意味とは違つて、判断、概念、推理等を指して居るのである。**モンテソリーはこのことをその著書の何處でもいふことわつて居るのではないから、始めてモンテソリーの著書を読む人は解釋に苦しむのである。私はモンテソリーの著書を反復熟讀して、やうやくモンテソリー一流の睿知といふ字の意義を知つたのである。

モンテソリーは睿知教育の一部として名稱教育

を行ふて居る。モンテソリーは名稱教育に於てセガンの三段階に従つて居る。**セガンの三段階は次の如き形式に於て行はれる。**

一、感覺的知覺と名稱との聯絡

二、名稱に對する實物の認識

三、實物に對する名稱の記憶

英語のお分りになる方には具體的の形式をお教へすることが出来る、英語の方が分りがよいかから一寸述べて置かう。

I This is red (これは赤です)

” ” blue. (これは青です)

II Give me red. (赤を下せ)

” ” blue. (青を下せ)

III What is this? (これは何ですか)

これを説明すると先づ第一段に於て、赤を示しつゝ、「これは赤です」と教へる、即ち赤といふ感覺的知覺と赤といふ名稱とを聯絡させるのである次ぎに赤や青を散らして置いて「赤はどれですか」

といつて兒童にこれが赤だと指示させる。即ち赤といふ名稱を擧げて、これに對應する實物の赤を認識させるのである、それから最後に實物の赤を出して「これは何ですか」と質問して赤といふ名稱を思ひ出させる、即ち實物に對する名稱の記憶である。これだけの段階を経て始めて名稱を完全に覺えることが出来るのである。モンテソリーはこの第二段に於て「赤を下さい」と言つた時、子供が間違へて青を取つて寄越しても間違つてゐますとは言はずにその日はまだ覺える力が準備されて居ないのであるとして「ハイ有難う」と言つて莞爾として受取つて置くのである、而して又翌日新しく教へ直す、これは自由主義の現れであらうけれどもあまりに柔が過ぎるやうに私は思ふ、成程無理をせずに自然の發育を待つといふことには一理あるけれども、「赤を下さい」と言はれて間違つた青を出してもそのまゝ承認せられたならば子供は青を赤と思ひ違へて了ふやうなことが起らな

いとも限らない、子供が間違へて青を出したらそれが赤ですか」位の反問をした方がよろしいと思ふ、この邊も皆さんが宜しく手加減をなさる必要があると思ふ。

モンテソリーが睿知教育として擧げて居るものに簡單なる色を使用しての寫生がある。「兒童の家」で子供に色鉛筆で樹木を描かせた、すると子供は幹と枝とを赤で、葉を緑で描いた。そこで先生が「戸外へ行つてよく樹木を見ていらつしやい」と言つて觀察をさせた、子供は今度は幹を褐色にして、枝と葉とを綠色にした。もう一度よく見ていらつしやいと言つて觀察をさせて描かせて見ると今度は幹と枝とを褐色にして、葉だけを綠色にした、斯くの如くして兒童の觀察は訂正されるのである。それから又麻布や絹布やリネンや木綿に觸つてその名稱を言ひ得るやうな練習もするのである。

モンテソリーは仕事をすべて遊戯化するのであ

る。例へばフレールベルは長方形を教へるのに邊や角を教へたのであるがこれでは幾何學であつて、子供はチツとも面白がらない。モンテンリーは長方形を教へるには食卓準備の遊びをして教へる。先づ長方形の食卓を運び出して、長い方の邊には二人前、短い方の邊には一人前のお料理を並べさせる、これで二邊が他の二邊より長いことが分る、次ぎに真中に花瓶を置きませうと言つて中心のあることを知らせる、四隅にナブキンを置きませうと言つて四つの角のあることを知らせる、と斯ういつた調子なのである。

モンテンリーは次いで読み、書き、算盤を教へるのである、これはモンテンリーの早熟教育と言つて批難せらるゝ點であるが、私はモンテンリーの方法に従つて教育する場合には決して早熟教育の誹を受くべきものでないことを信ずる。

モンテンリーの書き方教授は次の三段から成立つて居る。

### 用筆練習

#### 書き方 文字の記憶

#### 文字の組立

用筆練習としては先づ切り抜かれた色々の形——圓形や方形等を白紙に當て、その縁を取る、次ぎにはこの縁取つて出來た圓形や方形の全面を丁寧に塗り潰す、最初の中は塗り方も不規則で時々輪廓の近くを塗り落したり、輪廓の外へハミ出したりするが漸々慣れて來ると上手に塗れるやうになる。これが凡ば出來上ると第二段の文字の記憶に移る。これには厚紙にイロハを凹字で現した字型を作つて置き、これを指頭で觸り、形を覺えさせるのである、慣れると目をつぶつて文字に觸れさせてもその字體が明かに分るやうになる。次ぎに先生は「これは何々である」とその發音を明確に教へ、視覺、觸覺、筋覺及び聽覺の聯絡を取るのである、子供は之を非常な興味を以て迎へ、自ら進んで練習をする。次ぎには先生の口唱するのを



聞いて、之に應ずる字型を拾ひ出させる。それから第三段となると是等の文字を綴り合せる。例へばトとケとイの三字を綴り合せる。子供はト、ケ、イと始めは別々に讀んで居るがそのうちにトケイ——は、あ時計だなど気が附く、子供は無上に嬉しがる、而して直ぐペンを握り始める、前に字型をよく覚えて居るので正確に文字を書く。この始めて字が書けたときの喜びは非常なものである、紙をくれ、紙をくれとせがむ、而していろ／＼な文字を書く、紙がなければ何處へでも書く、パンの塊の上にもまで書いた子供もあつた。「兒童の家」の壁には小さい塗板が四方に取附けてあるので、子供は盛んにその上に文字を書くのである。モンテソリーの方法は子供が何うしても書かなければならぬやうに準備させて置いて自分から書くやうにさせるのである、モンテソリーはこれを自發的書き方の法と言つて居る。イタールやセガンは書き方の練習をさせるに當つて文字の分解にのみ努

めたのであるがモンテソリーは文字を書く主體、即ち書く人の動作を分解したのである、これは誠に卓見であつて、モンテソリーはこれを又人類學的書き方の法とも唱へて居るのである。

次に讀み方の遊戲であるがモンテソリーはこれを左の二通りに分けて居る。

#### 讀み方の遊戲

物名の讀み方遊戲  
句の讀み方遊戲

前に述べた書き方の教育の内に既に讀み方の教育が行はれて居る。先づ物名の讀み方遊戲であるがこれは句とはいふもの、實は立派な文章である紙片に「マド ヲ オシメ ナサイ」「マド ヲ アケテ ソレカラ オシメ ナサイ」「コノ クミノ ナカ カラ 十ニン ダケ エラビ ダシテ アナタ ノ スキナ ウタ ヲ ウタハセ アナタ モ イツシヨ ニ オウタヒ ナサイ」などと書いてこれを子供に渡す、而して「皆さん、今あげた紙に書いてあることが分りましたか……」

それでは太郎さんから始めて下さい」といふ。太郎は紙片に書いてある文章通りの行爲を行ふ、これも子供は非常な興味を以て行ふのである、皆「誰さんは何をするのでらう」と期待しながらその行爲を熱心に見守つて居る、臆がて自分の番となると得意になつて自分の了解した意味通りの行爲を行ふ、この間先生はたゞ傍に立つて、黙つて見て居るのである。

それから算盤即ち算術の教授であるが、これも初めは主として實物を使用して「あなたの前掛にはボタンがいくつあるか」といふやうなことから始めて行く。尙視覚教育の際使用した「長段階」を使用して二十以下の数の加減乗除を教へるのである、即ち十に五を加へるといふ時には一メートルの棒（前に言つた如く一デシメートル毎に色の塗り分けがあるから十に區分せられて居る）に五デシメートルの棒を継ぎ足させて、一區分づつ勘定させれば十五といふ數を得る、又十から五を引

くといふ場合には一メートルの棒に並べて五デシメートルの棒を置き、あと幾デシメートルの棒を持つて來れば隣りの一メートルの棒と同じ長さになるかと計算させる、かくて後十から五引く五残るの事實を子供に覚えさせるのである。又一メートルの棒を二デシメートルの棒で計つて行き、十から二が幾度取れるか、即ち十を二で除すといくらになるかといふ計算をさせるのである、而してこれと同時に二が五つ集ると十になるといふ事實も何時の間にか覚えられて了ふのである。

## 訓育

モンテンソリーの訓育に於ては、(イ)獨立、(ロ)從順の二つが重大視されて居る、次ぎにその各に關する説明を述べて行かう。

### (イ)獨立

モンテンソリーはこの獨立を非常に大切な徳として居る。これは矢張自由主義と關聯して居ること

であつて、獨立の出来ない人間には自由は無いのである、赤ン坊は自から食物を選択することが出来ない、故に自由を有して居ない、離乳期になつて稍々自由を有するに至る、併し未だ言語によつて自己の意志を發表する能はず、歩行して自由に自己の位置を變ずることが出来ないから未だく奴隸状態に居るものと言はなければならぬ、すべて他人に依つて存するものには自由がないのである、自分の思ふ通りに出来る人が眞に自由を有する人である。そこで眞の自由を有するためには獨立した人とならなければならぬ、モンテソリーはこの理由から獨立といふことを力説して居るのである。兒童に獨立心を起させるためには下女使用は禁物である、私は自身の經驗に徴してこのことを斷言し得るのである、私のところでは質樸な下女を雇ひたいと思つて旅費を出して郷里からわざわざ一人の下女を呼び寄せたのであるがこの下女が不都合を働いたので、暇を遣して以來下女とい

ふものを使つたことがない、ところが子供の教育のためには非常に好結果を現して來た、私のところの九才の女の子などは自から髪も結ふ、袴も穿く、靴も磨く、時によると私の靴まで磨いてくれる、なるだけ他人の世話にならないやうにして自分で出来ることは自分でしやうとして居るのである。尤も下女を置くといふことにも辯護は出来る。世の中は分業であつて、一家の内には會計、育兒、客の待遇等主婦でなければ辨じない仕事もあれば下女下男で十分間に合ふ仕事もある、そこで忙しくて手の廻らぬ家庭では下女下男を置くことは一向差支がない、併し安逸を貪らんがために下女下男を雇ふとならばそれは甚だよろしくない、況んや大切な子女の世話までを下女任せにして置くなどといふことは言語同斷である。話が思はず横道へ行きかけたがモンテソリーは斯くの如き理由からして兒童に獨立心を養はしめんと努めて居るのである。「兒童の家」では子供は食事の場合自から

給仕することは勿論、三才から六七才までの子供に毎日掃除を課して居る、一方だけ釘付けにしてある固定机を横倒しにして床の上を掃いたり机の上の塵埃を拭うたりさせるのである。

### (ロ) 從順

次ぎには從順である、モンテソリーは例の如く分解法に依つてこの從順をも次の如く分解して居る。

### 消極的——自制 積極的——活動力大

モンテソリーの「兒童の家」は自由主義で支配されて居るので子供は各自思ひ／＼のことで遊んで居る。繪を描く者もある、恩物をもてあそんで居る者もある、ボタン嵌めをして指先練習を行つて居る者もある、戸外を馳け廻つて居る者もある、皆熱心に思ひ／＼のことで遊んで居る。こゝへ若しお客様が何か来て子供の唱歌が聞きたいなどと望めば先生は「皆さん、一寸お止めな

さい、お客様が皆さんの唱歌を聞きたいと仰いますから一つ唱つて上げませう」と言ふ、するとどの子供も皆一齊に遊びを止めて了ふ、これが却々出来ないことである、日本などでも小學校で兒童に筆を置いてなどといつても却々一齊に置くなぞといふことは出来ないものである。しかしこれが出来なければ自由でない、**お止めなさいと言はれた時自制(消極的從順)の力によつて容易く止めること**の出来るのは自由を有して居るからである中途でお止めなさいと言はれて止められないのは無理もないことで人間には完成欲といふものがある、やりかけた仕事は終までやつて了はないと氣が濟まないのである、しかしそこを訓練して自制力を得るやうにしなければならぬのである、モンテソリーは自制を養ふ方法として次の如きことを行ふのである、モンテソリーは子供に對つて**零度お辭儀をなさい**といふ、子供はうつかりお辭儀をする、モンテソリーは零といふのは何もないこ

とです、零度お辭儀をするといふことはお辭儀をしないことですと教へる、それから又零度お辭儀をなさいといふ、子供は相變らずお辭儀をする、又零度の説明をされる、何遍もこれを繰返して居る内にヒョイとお辭儀をしかゝつても中途で止めるやうになる。終ひには零度お辭儀をなさいと言はれても平氣で居る、斯くて自制が養はれて行くのである。

又水の満ちた鉢を運ぶことなども自制力を養ふ一法としてモンテソリーの採用して居る所である、それから一つ「靜肅遊戲」といふのがある、これは窓を閉ぢて室内を少し暗くして置き、一同靜かにして居る、チツとも音を立てない、呼吸さへも大きくはしない、而して先生の合圖で靜かに立つたり、腰掛けたりする。又先生が隣りの室へ行つて一人づゝ小さな聲で呼ぶ、呼ばれた子供は靜かに立つて、足音を立てないやうにして隣りの先生の居る室へ行く、これも自制力の訓練には大

變効果がある、モンテソリーは元來賞罰全廢論者であるがこの遊戲だけは例外としなければなるまいと思つた、然るに實際に行つてみたところ、豫想に大違ひ、子供は大變よろこんでこの靜肅遊戲を行つたといふことである。

茲で一吋申上げて置くがモンテソリーの教育説は形式陶冶の原理から見れば太した効果のあるものではないのである、子供が圓形や方形の形をハツキリと覺えたからとて太した効能のないことは勿論である、私が過日大阪へ行つた時彼地の保母の一人が私に向つて「モンテソリーの教育法はものになりまへん」と言つた。全く或る一面から見れば「ものになりまへん」のである。この形式陶冶の原理に就てお話すると長くなるから何も申上げぬことにするが兎も角形式陶冶の原理から見ればモンテソリーも太したことはないのである。

それから從順を養ふには一方積極的に活動力を大にする必要がある、骨惜みをせず、身體を駒の

やうに働かせなくてはならぬ。最もこの活動も無暗に行うたのでは効果が尠い、先生が傍から助けて秩序立て、行はせなければならぬ、又子供の趣味に適つた活動を選ぶことは勿論である。

活動は成るべく反復するがよい、私のところの子供は膝の上へおせてボンと軽く下ろしてやると喜んで何遍もやつてくれといふ、私は何遍でも子供の望むだけやつてやる、しかし大抵六七遍もやれば止めて了ふ。子供は反復を望む一方非常に移り氣なところがある、この矛盾には意味があり、十分なる教育的價值があるのである。それは子供は種々なる方面に智識を弘める必要があるので移り氣が存し、同時に或る智識は深めて行く必要があるので反復が存するのである、私は斯く解釋してこの矛盾を非常に大切なものと考へて居る。

大人が子供の活動を助ける時決して氣短かであつてはならない。「兒童の家」では交代で晝の食卓の準備をすることになつて居る、モンテソリーは

子供の活動の緩慢なことをよく知つて居るから當番になつて居る五六人の子供に早く十時半頃から晝飯を食べさせて了ひ、ゆつくりと食卓の準備をさせるのである。

## 體 育

モンテソリーは體育を次の如くに分解して居る

自由體操 自由遊戲  
體育 機械體操 徒手體操

教育的體操 指頭練習  
園 藝

自由體操は遊戲機械を澤山に備付けて置いて自由によつて體操を行はしむるのである、又何も道具は使はずに自由に體操せしむることもある、これは駢け足が主になつて居る。次ぎは機械體操であるがこれは人類學的に考察した結果、兒童の足をよく發育させることがその主な目的となつて居る、我々は腰の上下の長さが凡ば等しいの

であるが赤ン坊は胴の長さが六十八パーセント、足の長さが三十六パーセントである、赤ン坊がこの割合を變へずに成長して了ふと足の短い家鴨みたいな人間が出来上つて了ふ、そこで足の發育を愈々完全ならしむるためにこの機械體操を行ふのである。教育的體操の指頭練習はボタン嵌めによつて之を行ふのである、園藝に就ては別に説明を要せぬことと思ふ。

## 結 論

### 自由主義と兒童觀察

自由主義のことに就ては私がフレイベル會の例會で講演した「自由主義の誤解」と題する筆記が「婦人と子ども」(七月號)に掲載されて居るから就て御覽下されたい、たゞモンテソリーの自由主義の主目的は兒童の活動力を旺盛ならしむるにあるといふこと及びその副次目的は兒童を觀察するためであることを申上げて置く、この兒童觀察とい

ふことはモンテソリーの方で非常に大切なことになつて居るのであるが、或人は「それでは子供をお草紙に使ふやうなものである」といふ、これは一應最な話である、しかし本當に兒童を教育するためにには兒童をよく知つて居なくてはならぬ。故に兒童を知る爲めに之を觀察することは一向差支ないことである、お草紙にするとはいへ、他事あつて之を行ふのでなく、兒童を愛するため、自由ならしむるため、眞の教育を與ふるため、之を行ふのであるからお草紙にしてもいゝのである。

時間が尠いので急いでお話した爲めに定めし言ひ残しが多からうと信ずるが今日の講演はこれで一先づ切り上げて置く。(終)

(文部省保育講習科會外講演大意、文責在記者)